

令和6年度 学校関係者評価書

常葉大学附属とこは幼稚園

園長 池田 美穂

1 経営の重点にかかわること

学校教育目標 心豊かでたくましい子

重点目標 チャレンジする子、かかわりを楽しむ子

学年	評価項目（各学年の指導・取組の重点など）	自己評価	学校関係者評価委員会の評価
0 歳 児	○生活リズムを大切に、安心して幼稚園で過ごす - 身近な保育教諭に思いや欲求を受け止めてもらいながら、愛着関係を築いて過ごす。 - 安心安全な環境の中で、伸び伸びと遊ぶ。 - 身の回りの事に興味関心を持つ。	- 月齢や家庭環境に合わせて、安心して生活できるように意識してかわってきた。保護者、担当保育教諭の連携を密にし、一人ひとりに合わせた丁寧なかかわりをチーム保育として行うことができた。 - 落ち着いた生活の中でゆったりとかかわることで保育教諭との愛着関係を築くことができ、友達を少しずつ意識して遊ぶことができていた。 - 玩具の片づけやトイレトレーニングなど、身の回りの事に興味を持てるようにしたことで、喜んで取り組む姿が見られた。	A この時期に最も大切な愛着関係を育てることができている。生涯に及ぶ人への信頼を形成する大切な時期なので引き続き安心安全に留意してほしい。 A
1 歳 児	○自分の好きな遊びを見つけ、保育教諭や友達と楽しむ - 身近な保育教諭に気持ちを受け止めてもらいながら、安心して伸び伸びと遊ぶ。 - 生活の中で、見る、触れる、真似るなどの経験をし、人や物への興味関心を広げる。 - 身の回りの事に興味関心を持ち、少しずつ自分でやってみようとする。	- 各家庭や保育教諭同士で連携を密に取り合いながら、子ども一人ひとりが安心してできるように丁寧にかかわってきた。気持ちを受け止めてもらえる相手がたくさんいることで、子どもたちも安心して生活ができるようになった。 - 子どものやりたい思いを尊重し、励まし、温かく見守ってきた。安心感から身の回りのことに興味関心が広がり、「自分で」の気持ちが育ち、自分でやってみようとする姿が次々と育った。 - 自然環境や動植物、様々な遊具、教材などまんべんなく遊べるように環境を整えたことで、興味の幅が広がった。	A 芽生えてきた「やりたい思い」（主体性）を大切にしたい保育の成果がみられる。安心できる環境があるからこそ興味関心を広げ、生き生き過ごしている様子である。 A
2 歳 児	○保育教諭や友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わい、親しみを持つ - 安定した生活を送り、その安心感のもと身の回りの事を自分で行おうとする。 - 保育教諭や友達とのかかわりの中で、一緒に過ごしたり遊んだりする心地よさや楽しさを感じる。 - 日々様々な体験をする中で好きな遊びを見つけ、伸び伸びと自分なりに楽しむ。	- 園生活を楽しみながら、安心して過ごせる場所であるよう、温かな雰囲気心掛けた。また、子どもの様子を見ながら、自分で行う事を増やしその過程を褒めつつ、やる気を促していったところ、徐々にできることが増え、自信へとつながってきた。 - 保育教諭や友達との愛着関係を築けるように、気持ちを代弁することで、互いに気持ちよく過ごしてきた。子ども同士の間に入る事を心掛けて過ごしてきたところ、徐々に気の合う友達を見つけ、名前を呼び合い楽しむようになっていった。 - 子どもたちと一緒に体を動かして遊び、面白い事や不思議なことを繰り返し体験しながら楽しさを味わう中で、自分たちでも誘い合い、簡単なやり取りをしながら遊ぶようになった。	A 友達とのかかわりが増えて一緒に遊ぶことを心地よく楽しんでいる様子がみられる。他者（保育教諭・友だち）との関係性の構築を重視された保育の効果が感じ取れた。 A

満 3 歳 児	○保育教諭や友達と一緒に遊ぶ楽しさを味わい、親し みを持つ ・保育教諭や友達とかかわり合う中で安心感を持って生活をする。 ・自分で身近な身の回りの事をやってみようとする。 ・自分の好きな遊びや安心できる場所を見つけ、友達や保育教諭と一緒に遊んだり生活する事を楽しむ。	・保育教諭と一緒に遊んだり生活したりする中、子どもたちの思いを受け止めたり、汲み取ったりしていくことで子どもの安心感に繋がった。またスキンシップをとることで保育教諭が安心できる場になっていった。 ・着替えや身支度など、保育教諭と一緒に進めていくことで、自分でやろうとする気持ちが大きくなっていった。日々繰り返し行う中で、できるようになると子どもたちの自信にもなり、新しいことへ挑戦する気持ちも芽生えた。 ・保育教諭と一緒に遊ぶことで、友達とのかかわりが増えていった。同じ場所や玩具で遊ぶ中で、言葉でのやり取りがみられるようになった。また、友達がやっている興味のある遊びを真似して遊ぶ姿も見られた。	A	クラス構成が変化する中で子どもが落ちていて生活できる配慮がなされている。複数の保育者の協働がうまくいっていることが充実した保育に繋がっているのではないか。	A
3 歳 児	○友達や保育教諭と楽しく園生活を送る ・好きな遊びや安心できる場所を見つけて楽しく遊んだり、身の回りのことを自分でやってみようとする。 ・身近な環境（人的・物的）に関心を持ち、その子なりにかかわろうとする。 ・自由な表現を楽しみ、豊かな感性を育む。 ・集団生活に必要な習慣やルールを知る。	・身支度や着替え、排泄など、個人差が大きかったため、保育教諭と一緒に進め、丁寧にかかわり援助することで少しずつ自分で行うことが習慣となっていった。褒めることで自信に繋がるようにした。 ・両クラスで過ごす時間を多く設け、友達とのかかわり方や気持ちの切り替え、相手の声に耳を傾けるなどの経験ができるようにしてきた。 ・様々なコーナーを用意して、子どもたちが自ら興味のある遊びを十分に楽しめるように環境設定を行った。自分なりに考えた遊びに必要な物を保育教諭に伝え、友達や保育教諭と一緒に作ることを楽しんできた。 ・集団生活の中で自信を持って過ごす姿がある一方で、自己主張や自立心が強くなってきた。まだ甘えたい気持ちもあることを理解して過ごせるように引き続き援助していく。	A	生活技術が異なる子どもたちが一体感をもてるようなかかわりをしている。ルールを覚えて集団遊びを楽しむ姿がみられ、楽しく園生活を送っている様子が伝わってきた。築いてきた安心安全の関係性を土台として「新しいことへ挑戦する気持ち」が芽生えたことは大きな成果である。	A
4 歳 児	○友達と夢中になって遊ぶ ・気の合う友達や保育教諭とかかわりながら、色々な遊びに興味を持って楽しむ。 ・身近な自然に興味を持って触れたり見つけたり探したりしながら、不思議に気付いたり考えたりして、遊びや生活に取り入れる。 ・園生活を送る中で自分の思いを言葉や態度で伝えたり、相手の思いに気づいたりする。	・集団で生活する中で、色々な友達に興味を持ち一緒に遊んだり話したりする姿が見られた。またルールのある遊び（しっぽ取り、鬼ごっこ、なんでもバスケットなど）を友達とルールを確認したり守ったりして遊び、自分たちだけでもルールのある遊びを楽しめるようになった。 ・季節の野菜を育てる中で、毎日水やりを行ない、小さな変化や生長に気付き、友達や保育教諭に共有し喜ぶ姿があった。また収穫を楽しみにし、クッキングで自分たちの育てた野菜を食べられる嬉しさが子どもたちから感じられた。苦手意識のある子も食べてみようとする姿が見られた。 ・保育教諭に困ったことを相談したり友達に自分の気持ちを言葉で伝えようとしたりする姿があった。また生活や遊びの中でさまざまな考えや気持ちに触れ、相手と自分の思いの違いに少しずつ気付くことができるようになった。	A	幼児らしい豊かな遊びや植物を育てる体験ができるような環境を整えている。友達とやり方を教え合ったり、物の貸し借りをする等、自分の思いの表出・開示に加えて、他者意識の成長が感じられる。	A

5 歳 児	○遊びを通して協同性と思いやりの気持ちを培う ・主体的に遊びや活動に取り組む中で、自分なりの目標を持ったり、探求心や意欲を持ち、充実感を味わう。 ・友達や異年齢のとのかかわりの中で、思いやりの気持ちを持ったり、思いを伝え合う事で相手を知ったり遊びを進めたりする。 ・話を聞き、場にふさわしい態度を取る。 ・様々な経験を通して興味関心を広げたり、感じたことを様々な形で表現したり、それを遊びに取り入れたりする。	・日々の生活の中で、「こと、もの」に対して常に自分事として考えられる様、個に合わせて丁寧にかかわっていくことにより、少しずつその子なりに周りを見て動いたり、自分の考えを持って行動したりすることができるようになってきている。 ・行事やあそび、生活を通して、自然と異年齢とのかかわりや繋がりが生まれ、年上として行動する喜びや充実感を味わっていた。特に、「わくわくの日」「生活発表の日」「卒園遠足」では、一人ひとりが目的や目標、意欲や探求心を持ち、夢中になって取り組み達成感や充実感を味わっていた。 ・実体験を通して、興味関心を広げ、それを遊びに繋げ友達とイメージを共有しながらより楽しくしようと思いを伝え合いながら協力し遊びを進める姿が見られた。 ・子ども同士が自由に対話をする「こども会議」をとおして、自分の考えや思いを安心して相手に伝えたり、聞いてもらう嬉しさ、相手の考えを知るきっかけとなった。	A	子ども主体の遊びや実体験が大切にされ達成感・充実感に溢れる様子である。 5歳児のあそびや生活の充実は乳児期からの積み重ねに根差すものと感じられる。他者との対話と共に自分自身との対話の力が育っているように感じられる。	A
-------------	--	---	---	---	---

2 各指導部などにかかわること

評価項目（各指導部などのねらい・取組など）		自己評価		学校関係者評価委員会の評価	
1 安全・ 保健管理	○様々な場面を想定して避難訓練、不審者訓練や非常食訓練などを定期的に実施し、子どもの安全確認や意志向上に努め、安全管理体制を高める。 ○AED研修を行い救急への意識を高める。 ○地域、家庭との保健に関する情報交換を綿密に行い、流行性の疾患情報の開示を随時行う。 ○食物アレルギーなど、子ども一人ひとりの健康に配慮した保健指導を行い、給食業者との連携を図っていく。 ○定期的な遊具の点検と園庭の安全管理を行う。	・不審者訓練は子どもたちに浸透してきて素早く避難することができたが、様々な状況を想定し引き続き訓練を行っていく。 ・地震、火災、洪水の訓練の大切さを伝え、引き続き子どもたちと訓練を行っていく。 ・AEDの使用方法是今年度も全員が研修を受けた。けがの対応などの研修もできるとのことなので検討し受けていきたい。 ・5月に流行性角結膜炎、9月に手足口病、12月にインフルエンザなどが園内で流行した。これらの流行性の感染状況により、保護者に各クラスの欠席者数などの状況を伝えたりクラスの2割の園児が同一の感染症で欠席の場合は早帰りの措置をとったりするなど感染対策をして蔓延しないよう努めた。 ・交通安全教室、歯磨き指導などを実施し、健康や安全が意識できるようにした。 ・遊具の点検は、日々職員の目視で行っているが、劣化や破損している箇所が増えているため、都度補修するなど対応してきた。引き続き、事故やけがの防止に努め、子どもたちが安心安全に遊べる環境を維持していく。	A	不審者、自然災害、感染症対策など多方面に配慮した取り組みが行われている。 多くの子ども達をお預かりしている上でインシデントの発生は避けられない。今年度、廊下にマットを敷く等環境を整えていたが、今後も引き続き事故発生防止のために適切な対応をお願いしたい。	

2 運 営 組 織	○職員同士の風通しの良いコミュニケーションを行行情報共有に努める。 ○相手の意見を傾聴し、自信を持って自分の意見を言えるような「対話力」を高める。 ○ICTの更なる活用により、記録の迅速化やリモート研修に積極的に参加したりする。 引き続き、研修の成果を他の職員も共有できる体制を整える。 ○会議は事前に各々で資料確認を行い、司会の職員も話し合う視点を絞るなど、効率よく会議を行えるよう努める。	・4月に質の高い保育・ところは幼稚園の目指す保育について職員全員で「キックオフミーティング」を行った。職員同士話し合う中で各学年の保育目標が定まり、お互いの考えを理解しやすくなった。また個人の夢も発表し傾聴することでお互いの性格や人間性について理解しようとした。 ・Wi-Fiの拡充により毎日の記録や調べ物を各保育室で行うことができ、集中して取り組むことができた。 - また、各保育室でiPadを使って生き物を調べたり、ダンスの振り付けを見るなどICTを活用することで子どもたちの興味関心を引き出し、理解を深めることができた。 ・前年度に引き続き、会議前の事前資料確認を徹底したことで時間短縮を心がけている。 司会は時間配分を適切に行い、重要な議題には十分な時間を確保するなど努め、効率よく会議を進めることができた。	A	職員間のコミュニケーションを大切にしつつICTも活用して運営に努めている。 保護者と職員、職員同士の関係がよく、安心して何でも話せる環境だったので保護者としてとても良いと思う。 小中学校では、教職員のメンタルヘルスが喫緊の課題となっている。引き続きウェルビーイングな職場づくりに取り組んでほしい。	A
3 研 修	○重点目標「チャレンジする子、かかわりを楽しむ子」を目指し園内研修2年連続のテーマ「園庭環境の工夫」について、今年度はまとめの1年とし取り組む。 ○年3回全職員で研修を行い、ところは幼稚園の保育の方向性を共有し学びを深めていく。 視聴した「こどもかいぎ」の根本部分を保育に生かす工夫に努める。(対話の重要性) ○たちばな幼稚園との合同研修会や外部研修会に意欲的に参加し、スキルアップを図ると共に、保育の質の向上を目指す。	・月に一度「砂場」「色水」「満3歳児以下」の3グループに分かれ、話し合いを行った。砂場では泥遊びや泥団子、色水ではチョークを使った色水作りやクレパ紙への色付けや型どり、満3歳児以下では、水遊びでも使えるウォーターテーブルを使った遊びについて話し合い、その都度発表をすることで、子どもの姿から見えてきた学年ごとの育ちや、そこから見えてくる課題、それに対しどのような環境の設定が必要になってくるかについて、付箋や写真を利用して職員で共有し、話し合いを深め、次の保育へと繋げていった。 ・全職員での研修第1回(4月10日)に「こどもかいぎ」を視聴したことにより、「対話の重要性」を共有する事ができた。学年により方法は変わってくるが、応答的な対応を心掛け、日々振り返りつつ保育を行ってきた。第2回(8月31日)は法人より講師の先生を招き、人として、保育教諭として何が大切であるのかを学び、根本部分から自分を見つめ直す機会となった。第3回(2月15日)は対話の実践を通して、人と思いが違う事を知り、互いに思いやる大切さを学んだ。 ・外部研修や他園を視察するなど、各々がスキルアップする機会が増えた。 また、各自が学んだことを報告し共有し、自身の保育に活かすなど、質の高い保育を目指すよう努力している。引き続き、意欲的に研修に参加していきたい。	A	研修の定例化や講師を招いての研修、外部研修・視察、合同研修など多様な研修の場があり、大変充実していると思う。 全職員が資質向上の意欲を持って研修に参加し、努力を続けていることが子どもたちの育ちに繋がっていくと思われる。	A

4 家庭・地域との連携	○各家庭に保育の様子を発信したり、園行事などに参加してもらったりする中で、保育への理解を深める。 ・各学年、保護者のみが見られるホームページの鍵付きの項目への投稿を定期的に行う。日々の遊びの中での子どもの気づきや育ち、行事への繋がりや過程などを伝え、保育理解に繋げられるよう工夫していく。 ・行事に保護者も参加する機会を作り、一緒に楽しみながら保育の中で大切にしている事を感じていただく。 ○PTA とのコラボ企画を定期的開催し、保護者同士交流の場を作る。 ・休日や夜など親子でわくわくする内容を企画し他の家族との交流の場とする。(園庭遊び、星見会など) ・保護者同士おはなしの会を「Book Cafe」と称して毎月 1 回開催予定。保護者同士のネットワークづくりのきっかけとなる場を提供する。 ○全職員が、どの保護者に対しても自ら挨拶をして明るい雰囲気を作り、保護者がいつでも相談しやすい関係作りを心掛け、信頼関係を築いていく。 ○地域にところは幼稚園を知ってもらう ・未就園児遊びの会「とことこクラブ」を年 13 回開催予定。親子で楽しい時間を過ごせるよう内容を工夫する。 ・Instagram を通じて、園の魅力を外部へ発信していく。 ・近隣のお祭りやイベントに参加したり、老人施設への訪問したり、地域との連携を深めていく。	・各学年、月 2 回以上のブログを投稿し、園生活の中での育ちを伝えるようにしてきた。参観会、運動あそびの日、生活発表の日など保護者来園行事の前は、遊びの繋がりや経過を知らせ、来園時の姿だけの切り取りとならないよう工夫を心掛けたことが、保育理解にも繋がった。 ・行事、保育サポート・保育参加、PTA コラボ企画(年 5 回開催)など、保護者と一緒に保育を楽しむ機会を設けたことで、より園を知っていただけたと感じる。今後、もっと多くの方に参加していただけるような企画を考えていきたい。 ・「Book Cafe」は「とこカフェ」と名称を決め、年 8 回開催をした。参加者は少なかったものの、とても良い雰囲気の時間が流れていた。ネットワークづくりの第一歩として始まったので、次年度も継続していきたい。 ・「とことこクラブ」への参加者は、昨年度 11 回開催で 233 組、今年度 12 回開催で 186 組とかなり人数は減ったが、継続的に参加してくださる方は多かった。子どもが小さい頃から働く保護者が増えていることを実感することとなった。近隣の子育てサロンや園と情報交換をしながら、日程や内容の工夫をしながら、地域の子育て支援の役に立てるような場となるようにしていきたい。 ・Instagram は職員の知り合いにも積極的に広めている。見た方からは、「保育の様子が分かる」「説明を読むと子どもが主体的にものごとにかかわっていることがよくわかる」との感想もいただいた。園の魅力を外部へ発信するツールとして、今後も活用していきたい。 ・年長児が刑務所の矯正展へ参加した。園の獅子舞にウエル城北の方が見に来てくださった。地域との交流・連携は、今後も大切にしていきたい。	B	保護者の就労状況等により連携が難しくなっている今日的状況の中で、様々な工夫がなされている。 工夫の内容として、保護者・家庭・地域と豊かな関係を築くべく斬新な企画を次々と試みている。 自己評価は B になっているが、これは課題に気付く力の表れで今後に繋がっていくものだと思う。地域から求められることの変化に気づき、それに応えていける園づくりになっていると感じた。	A
5 常葉大学内連携	○たちばな幼稚園との研修や交流。 ・両園合同研修を行い、その中での気づきを保育に取り入れたり、情報交換をする事により、質の高い保育を目指す。 ・5 歳児が互いの園を訪問し合い、交流をする。 ○橘小学校との交流、学校訪問。 ○中学、高校、短期大学部、大学の実習生や学生の受け入れをし、パイプ強化を図る。 ○大学、高校などでの授業を行い、育成に携わる。 ○短期大学部、保育学部との共同研修の推進。	・両園合同研修では、お互いの園内研修での学びを報告し合う中で、気づきや課題など共有し話し合い多面的な見方ができ、問題解決へと繋がるきっかけとなった。 ・6 月と 11 月に 5 歳児が交流。お互いの園を訪問し、自分たちが楽しんでいることをとおして一緒に遊び交流を深めた。 ・実習生、学生の受け入れ、また大学、高校の授業により、こちらの学びも多い。今後も引き続き、学生が、子どもとのかかわりなどに魅力を感じられる様な幼稚園である様努めた。 ・自分たちが抱えている課題の解決に向け、積極的に短期大学部、保育学部の先生方と共同研究を進めたい。	A	幼小中高との交流、大学の実習生には新たな指導方法を取り入れていてとても良いと思う。内地留学のように、大学・短期大学部のある強みを生かしてキャリアアップを図るのも一案ではないかと思う。	A

*A 十分達成されている B 達成されている C 取り組まれているが、成果が十分でない D 取組が不十分である